

青年ヘーゲル学派とマルクス (V)

——マックス・シュテイルナー——

別 府 芳 雄

は し が き

今回はマックス・シュテイルナーをとりあげる。シュテイルナーは、わが国では比較的研究の遅れている哲学者であり、彼の余りにも薄幸で短い生涯のゆえに、こんにちまで無視され続けてきた人物であり、せいぜい「逃避的プチ・ブル思想家」「エゴイスト」というイメージで彼を理解してきた。しかし違う。シュテイルナーはこんにちの「実存主義の原点」(アルヴォン)であり、当時において、現代の実存主義思想を提唱していた珍しい哲学者であって、サルトルの実存主義は「すでに百余年前にシュテイルナーが放った予言的言葉の実証」(松尾)といわれる。こんにち、『唯一者とその所有』の著者シュテイルナーにかんする研究は西欧思想界で再評価され、静かなブームとなって拡がりつつある。

小論ではⅠではシュテイルナーの生涯を、Ⅱでは彼の思想を、Ⅲではシュテイルナーとマルクスとの関係について述べる。

I

マックス・シュテイルナー (Max Stirner) は、本名をカスパー・シュミット (Kasper Schmidt) といって、1806年10月25日午前6時バイエルン州のバイロイト (Bayreuth) で笛製造業者 (flute maker) の独り息

子として生れた。洗礼は11月6日。当時のバイロイトには約800ぐらいの家がたちならんでいて、この町の67番地の大通りに面した家が彼の生家であった。バイロイトは「当時はあまり知られていない、へんぴな町¹⁾」であった。彼の途方もなく高いひたい（このStirnはひたいの意味）から、彼の学校時代の仲間がシュテイルナーと綽名をつけた。日本流に言えばオデコさんというぐらいの意味であった。この綽名^{あだな}を彼がペン・ネームとしたものであった。だから「彼のペン・ネーム (nom-de-plume) は、彼の額の異常な大きさからとってきたもの²⁾」で、それゆえ「Max Stirner は、正しくは Max the Highbrow (知識人マックス) と訳されるべきかもしれない³⁾。」とウドコックは述べている。シュテイルナーの生涯の記録は、詩人ジョン・ヘンリー・マッケイ (John Henry Mackay) が1890年代に苦労して集めたらしいが、「衰れをさそうもの⁴⁾」であった。彼の父親 (アルバート・クリスチャン・ハインリヒ・シュミット) は、シュテイルナーが生れて半年^{はんとし}たらずで咯血して死亡した。彼は唯一の男子だったことになる。母は、ルードウィヒ・バラースシュテットという50才に近い宮廷薬局助手 (マクレランは歯科医と述べている) と再婚 (のちに発狂) した。母が再婚したとき、シュテイルナーは3才の幼児だった。母が再婚したため、シュテイルナーは、バイロイトの両親のもとにあづけられたので、彼はバイロイトのカトリック高等神学校で2級の課程を終えたのち、大学での研究を志し、1826年10月、20才のとき、ベルリン大学に進学して哲学を学んだ。ここでヘーゲルに学ぶことになる。つまり「1826年から1828年まで、彼はベルリン大学で哲学を学び、そこでヘーゲルの講義^{〇〇〇〇〇〇〇〇}を聞いた。ヘーゲルこそ、それに対して後に彼が決定的に反抗することになった最初の知的英雄であった。それに引き続く1学期間はエアランゲンで過し、そしてケーニヒスベルクで登録 (registration) を行った。そこでは、彼は今や精神病にかかっている母の世話をするためにクルム (Kulm) に呼ばれた⁵⁾」ため、学業を中断せざるをえなくなって、全然

講義に出席できなくなってしまった。

1832年10月(26才時)、彼はベルリン大学にもどって、プロシア高等学校教師資格試験に合格し、1834年3月、ベルリン大学を退学。まず彼は、有名なベルリン王室実業学校(Berlin Königliche Realschule)の教師となって、1835年の復活祭の日に、下級4学年のラテン語を8時間受持った。この頃から彼は教育問題に興味をもつ。1836年から1837年頃には、この教育問題に関連しつつ、新しい個人の研究に没頭し始める。1839年、彼はグロピウス夫人(Madam Gropius)の私立高等女子教育学院に就職し、5年間連続して講義した。彼はドイツ語と歴史を受持ったが、彼の静かな丁寧な性格のために娘たちの敬愛の的だったし、女性校長にも好評であった。この教師生活の間に彼は主著『唯一者とその所有』(Der Einzige und sein Eigentum)を書く。つまり1843年の大半を『唯一者とその所有』の著作に費して、1844年11月に公刊した。そして「すべての絶対者や制度を否定し、個々の人間の〈所有〉にのみ基礎を置く教義を提起することによって、ヘーゲル主義からほとんどその逆の立場へと進む⁶⁾」ことになる。彼はヘーゲルの弁証法には魅力を感じたけれども、その体系には反撥を感じた。彼の主著『唯一者とその所有』の内容は小論のⅡで述べるが、要は「その論理の力づよさ、その文体の明快さの点で壮大であり、1843年から1844年にいたる決定的時期におけるヘーゲル左派の運動全体をつかんだ要約⁷⁾」である。

1837年、彼は下宿先の女家主の姪にあたるアグネス・クララ・クニグンデ・ブルツ嬢と結婚して、オラニエンブルガー街の16番地に新居をかまえたが、彼女が出産の際に産褥熱にかかって、22才で死んでしまった。

彼がグロピウス女学院を退職したのは、『唯一者とその所有』がわざわざいしたものとされている。つまり彼の退職の原因は「温和なシュミット氏(Herr Schmidt)が彼の分身(alter ego)として、反乱をするため、暴力を喜ぶ恐ろしいシュテイルナー氏(the terrible Herr Stirner)でもある

ことがわかったためであったのだらう⁸⁾。」といわれる。つまりグロピウス女学院の温和な教師シュミット氏と『唯一者とその所有』の著者シュテイルナー氏が同一人物であることが発覚したためであろう、といわれている。

グロピウス女学院の教師時代、シュテイルナーは夕方になると、一種のボヘミアンたちの集りである「自由人」サークルに出かけた。フリードリヒ通りのヒッペル酒場 (Hippel's Weinstube) は「1840年代の初め、ベルリンの青年ヘーゲル学派の連中が、彼らの師の教説を議論し、修正し、ついには反駁するためによく集った⁹⁾」ところであった。この酒場におけるシュテイルナーの姿を、アルヴオンは巧く説明している。「他の連中が夢中になってどなり声をあげ、そうぞうしく言い合いながら、ブルジョアに対するこけおどしで満足していたあいだ、シュテイルナーは煙草をくゆらせながら——これは、彼の生活で唯一のぜいたくであった——紫煙のうず¹⁰⁾にその思惟をつなぎ止めているようす」だった、と。エンゲルスは彼の諧謔詩 (comic poem) 『信仰の勝利』 (Der Triumph des Glaubens, 1842) で、このヒッペル酒場のシュテイルナーを次のように描いている。「当座かれはまだビールを飲みつづけているが、間もなく、かれは血を、まるで水のように飲むことだらう。他の人たちが〈国王打倒!〉と荒々しく叫ぶと、すぐさまシュテイルナーは、こう徹底させる〈法律も打倒!¹¹⁾〉」と。ここですぐわかることは、シュテイルナーと青年ヘーゲル学派との出会いは、だいたい、この頃から始まっているということである。この酒場における自由人たちの集いは、ナポレオン没落後のドイツにおける例外的に自由な環境だったようである。

ただしシュテイルナーが1841年以前に、この一団に加っていたことはない。というのは「この年は、明らかに、シュテイルナーと決して会うことのなかったマルクスがベルリンを去った年¹²⁾」だったからである。

『唯一者とその所有』にみられる解放的な自由思想は、この酒場の自由

な談笑のなかで考えられたもののようである。彼は騒然たる Weinstube のなかで、いつも礼儀正しく、いつも微笑していて、服装も端正であった。しかし孤独の影はいつも彼を離れず、「社会人とごく浅薄に接触し、如何なる集団に混入しても常に唯一者として寂しく存在¹³⁾」していたといわれる。しかしまた彼は騒がしい社会的雰囲気¹³⁾を好んでいたようでもあった。

こうした生活がメクレンブルク (Mecklenburg) から若くて美しい才気ある女性マリー・デーンハルト (Marie Dähnhardt) ——彼女は行動の自由という点でジョルジュ・サンド (Sand.G) を気取っていた女性だったが——ベルリンにやって来て、よくヒッペルの酒場を訪れて、この自由人グループの仲間に加わったことによって、シュテイルナーの孤独は破られることになる。彼女はよくビールを飲み、タバコを喫んだ。先妻に先立たれた孤独なシュテイルナーが幸福への希望を、このマリーに見出したのも無理からぬことであった。じつはマリーには、サンドのような文才も、知性もすぐれた感情さえない女でしかなかったのに。

1843 年 10 月 21 日、彼は彼女と結婚し、彼女に、この『唯一者とその所有』を献じた。(ただし、結婚ののち約 1 年後出版)。結婚はシュテイルナーのアパートでおこなわれたが、「それはボヘミアン風は無軌道なものであった。牧師が行くと、花婿と立会人たちはシャツ一枚になってトランプをしていたし、花嫁はいつもの服装で遅れてきた。そして、皆結婚指輪を買うのを忘れていたので、式はブルーノ・バウアーのさいふからとり出した銅製指輪をつけることで終った¹⁴⁾」という有様だった。メーリングは「自由人」の悪ふざけとして「シュテイルナーの婚礼のときにバウアーが自分の鉤針編みの財布の真鍮環を、結婚指輪としては上等だと言って、おとなしい聖職者 (牧師) に手渡した¹⁵⁾」のだ、と説明している。結婚式でさえ、こんな仕末だったから、この結婚は失敗で、シュテイルナーの生涯を、その後みじめなものに変えていくことになる。幸福は束の間のことだ

った。というのはシュテイルナーが『唯一者とその所有』を出版した年に教職を放棄したからであった。そのうえ彼は、家庭生活においては殆んど小児のようであったし、浪費癖もあった。彼は妻に嘲笑され放しの夫であった。物質的窮乏から脱出しようとあせって、彼は、英・仏の経済学書の翻訳を始めた。1845年に彼は4巻のJ.B.セイの著書を翻訳し、1847年にはアダム・スミスの著作を訳出したりした。しかし下訳者(hack translator)としての収入は余りに僅かであったから、ブルーノ・バウアーの先例にならって彼も商売に手を出した。その結果は「マリー・デー・ンハルトはかなり裕福だったが、その資産はシュテイルナーが1845年に、それで買いとったクリーム工場(creamery)が翌年失敗に終わったときなくなり、かの女も同じ年にかれの¹⁶⁾もとを去った。」という悲劇的な結末を迎えることになる。彼は妻の残した最後の持参金まで使い果してしまったのである。

それでもマリーは1847年までは、この頼りない夫との結婚生活に堪えていたそうである。しかし遂に決心して、まずイギリスへ、次いでオーストラリアに去って、メルボルンで暮すことになる。この頃のマリーは貧困のため洗濯女にまでなったりしたが、のちに労働者と再婚した。1870年普仏戦争の年にマリーはロンドンに舞い戻ってはきたものの、人生に疲れ果てた彼女はロンドンで病み果てて80才の生涯を閉じている。

マリーに逃げられて、シュテイルナーは再び独りポッチになった。『唯一者とその所有』は、確かに彼に名声を与えたが、その名声は余りにも短く、彼の名は急速に忘れられ、やがて窮乏が迫ってきた。彼は貧困のなかで貧民窟を泊り歩いたりもした。そして『反動の歴史』(Die Geschichte der Reaktion, 1852)を出版したものの、「その単調な退屈さは、マックス・シュテイルナーの書というより、ヨハン・カスパー・シュミットの特¹⁷⁾徴を表わしていた。」といわれるくらい平凡なしろものであった。この書は2巻に分れていて、ただ翻訳とシュテイルナーが既に書いたものの再録

といった程度のもので、世人は誰も相手にせず、要するに、この『反動の歴史』は読むに耐えないしろものであった。彼は借金のため2度も投獄された。

1856年の彼の死にいたるまでの晩年を、彼は数多い債権者を避けて暮さなければならなかった。毎日債鬼に追い立てられて、家から家を逃げ廻るように過^{すご}していった。窮迫のどん底に落ちた彼は小売商人の仲買人にまでなって、僅かな金をえたこともあった。1856年6月25日、彼は窮乏のうちにベルリンで死んだ。49才の若さであった。彼のえり首を刺す一匹の毒蠅が彼の生命を奪ったといわれる。彼は、母も妻も子も、誰ひとり看とる者なしに死んだ。ブルーノ・バウアー、ルドウィヒ・ブールが彼の葬式に参加した。ジョン・ヘンリイ・マッケイがシュテイルナーの石碑を墓地に建てたのは、1892年になってからのことであった。

- 注 1) G.Woodcock: Anarchism — A History of Libertarian Ideas and Movements — The World Publishing Company, 1962. p.96. ウドコック『アナキズム』(1) 白井厚、邦訳、紀伊国屋書店、1968、134頁。
- 2) ibid., p.96. 邦訳、前掲、133頁。
- 3) ibid., p.96. 邦訳、前掲、133頁。
- 4) ibid., p.96. 同書134頁。
- 5) ibid., p.96. 同書134頁。○印引用者。
- 6) ibid., p.94. 同書131頁。○印引用者。
- 7) アンリ・アルヴオン『アナーキズム』左近毅邦訳、白水社、1972年、49頁。○印引用者。
- 8) G.Woodcock, op. cit., p.99. 邦訳、前掲、137頁。
- 9) ibid., p.97. 同書135頁。
- 10) アルヴオン、前掲、48頁。傍点引用者。
- 11) D.McLellan, The Young Hegelians and Karl Marx, op. cit., p.118. マクレラン『マルクス思想の形成』前掲190頁。
- 12) ibid., p.118; 同書190～191頁。○印引用者。
- 13) 松尾邦之助『ステイルナアの思想と生涯』星光書院、昭和25年、210頁。
- 14) G.Woodcock, op. cit., p.98. 邦訳、136頁。
- 15) メーリング『マルクス伝』(1)、前掲、103頁。

- 16) D. McLellan, *The Young Hegelians and Karl Marx*, op. cit., p.117.
邦訳, 前掲, 190 頁。
17) G. Woodcock, op. cit., p.99. 邦訳, 前掲 138 頁。

II

シュテイルナーは、1842 年 4 月の『ライン新聞』(Rheinische Zeitung)に「われらの教育の人為的原則,あるいはヒューマニズムとリアリズム」という論文を発表しているほか、1842 年 6 月には、同じく『ライン新聞』に「芸術と宗教の関係」というヘーゲル学派が好んで取扱った芸術と宗教の問題にかんする、やや長文の論文を発表している。また『ベルリン月報』(Berliner Monatschrift)にも 2 つの論文を掲載している。その 2 論文は「その一つはいかなる国家の理念をも拒否するものであり、……もう一つは、ユジェヌ・シュー (Eugène Sue) の通俗小説『パリの秘密』(Les Mystères de Paris)の論評で、そのなかで彼は¹⁾固定的な²⁾道徳的規範に何一つ構うことなく自我を高く評価³⁾する。この固定観念に⁴⁾対する反抗は、彼の主著『唯一者とその所有』に一貫して認められる。

彼の主著『唯一者とその所有』が読者に与える強烈な印象は、「その情熱的な反知性主義²⁾」である。マクレランは本書が「滅法パンチがきいて、しかもなかなか魅力のある無政府主義的で実存主義³⁾がかった著作(anarcho-existentialist work)」で「宗教であれ、自由主義であれ、社会主義であれ、人類を抑圧するすべての勢力に幻影の烙印を押し、ひとはあらゆる形の自己犠牲を拒否し、意識的なエゴイズムをもっぱらわがこととすることによって、これらの幻影から自己を解放⁴⁾すべきことを説いている、と要約している。また本書では「ヘーゲルにとどまらず、フォイエルバッハ、マルクスそしてプルードンまでも拒否した。ヒッペル酒場の常連たち——そして、とりわけブルーノ・バウアーも他の人たちと共に非難⁵⁾」

されている。要はシュテイルナーは「単にすべての宗教的信仰を破壊した
 だけではなかった。絶対的原理であろうと、党であろうと、またはたとえ
 人類のような抽象的集団であろうと、個人の上に君臨する……と思われた
 ところのあらゆる政治的、社会的、哲学的思想を破壊⁶⁾」しようとしたので
 ある。

おそらく、生来の無気力から脱出しようと涙ぐましい努力の結果、書き
 あげたものであろう。本書では「著述家マックス・シュテイルナーは全く
 絶望によって生き残り、それが彼の抗議にその独特な活力⁷⁾」となっている
 点が窺える。本書が訴えている要点は「人間の思考が人為的につくったす
 べてのものを、本質的な自我にまで切断⁸⁾」することにある。

まず、『唯一者とその所有』は2部に分れている。第1部 人間、第2
 部 自我から構成されている。形式上では「弁証法的で3分法 (triads)
 で分けられたこの本の形式はヘーゲル的であり、言語や語根に慎重な注意
 が用いられている点も⁹⁾」やはりヘーゲル的である。

第1部では人間の生涯が三分法の形式 (triadic form) で描かれている。
 そして第1部、人間篇の巻頭で「人間は人間にとって至高な存在だ、とフ
 ォイエルバッハはいう。人間は今やはじめて発見されたとブルーノ・バウ
 アーはいう。では、この至高の存在、この新たな発見なるものを、より厳
 密に見きわめようではないか¹⁰⁾」と書き始める。つまり人間に対する注目か
 ら、人間としての彼自身がまず何物であるかをハッキリ把握することから
 始めようという。人間は思想の背景に、いつも自己を発見する必要がある
 し、思想の所有者としての自己をもつと凝視する必要があるし、神とか国
 家とか全体というような第3者のために具体化されたような、いっさいの
 思想は実に幽霊にすぎないものなのだ、という。

第2部では、自己の完全な解放への方法を述べている。つまり「自己が解
 放されるのは他の永遠な理念や価値に愛着することによってではなく、そ
 れ自身をこれらの理念のいっさいのあみ (toils) やわな (snares) にかか

らないように高めることによってである。私の自己は私自身の創造物であり、私自身の財産であり、その力には制限はなく、全面的に私のもの¹¹⁾」だからだという。

本書の内容で主要な点は、(1)「反ヘーゲル」と(2)「自由について」という2つの問題である。先づ「反ヘーゲル」という点については、彼は「ヘーゲルのキリスト教的哲学の完全な終焉をはっきり意識しながら、この哲学の事実上の後継者として、既存の国家とキリスト教の完全な否定を意味する〈変革〉を宣言¹²⁾」したひとりであるのみならず、「ヘーゲル哲学を急進的批判主義とニヒリズムによって斃死¹³⁾」させた哲学者であったといえる。もはやヘーゲルの観念弁証法という古い革袋に新しい酒を盛ることはできない、としてヘーゲル哲学の終焉を宣言し、進んでヘーゲル哲学の「完全なる転倒」に向ったのである。ヘーゲルは「論理の天才的幻術師であり、プロシア的精神 (Geist) の創造者¹⁴⁾」であり「論理的な調和のコスモスの完成者¹⁵⁾」として、シュテイルナーにとってみれば、ヘーゲルの哲学は「プロイセンの復古的精神の学問的な住み家¹⁶⁾」と感じられたわけだ。だから、シュテイルナーは、ヘーゲルのような概念の体系でなく「それぞれの唯一の自我 (das je einzige Ich) が各自の世界の所有者になるような新しい時期の始まり¹⁷⁾」を宣言することによって「すべての絶対者や制度を否定し、個々の人間の〈所有〉にのみ基礎を置く教義を提起することによって、ヘーゲル主義からほとんどその逆の立場へと進¹⁸⁾」んでいく。なぜならば、シュテイルナーにとっては概念などというものは、単なる抽象であり、単なる幻影であり、幽霊にすぎないからであり、また彼は「すべての自然な法や共通の人間性を否定する点においてニヒリズムと実存主義に近づいていく¹⁹⁾」のだ、といい換えてもいい。

この『唯一者とその所有』が刊行された時、それは「ヘーゲル陣営への脅威となり、論壇は駭^{おどろ}いて、この著作の攻勢の前に戸惑い、ヘーゲルの絶対論はたちまち明るみに出された幽霊的狼狽²⁰⁾となった。」と松尾氏はシュ

テイルナーの著作の反響を述べている。

ヘーゲル哲学について、シュテイルナーはいう。「そこでは、思惟にはまさに全的に現実・事物の世界が照応させられ、いかなる概念も現実なくしてはありえぬ、とされる。このことがヘーゲルの体系に、もっとも客観的という名をえさせたのだ。あたかもそこで、思惟と事物が合一をことほぐかのごとくに、だ。だが、これはまさに、思惟のこの上ない横暴であり、思惟の最高の暴政、絶体支配であり、精神の勝利であり、またそれに伴って哲学の勝利であるのだ。哲学はもはやそれより高いものを成就しえない。けだし哲学の最頂は、精神の全能であり、精神の全権であるから²¹⁾だ。」それこそ「まさに、その頭のなかに幽霊が徘徊する」(spukt ja in ihrem Kopf) ということ、で、「もろもろの概念があらゆる場合に決定を下し、概念が生を規制し、概念が支配するのだ。これがすなわち、ヘーゲルによって体系的表現をあたえられた宗教的世界なのだ。つまり彼は方法を無意味化し、概念の諸定則を完結した堅固な教理学 (Dogmatik) へと完成させたのだ。一切は概念に従って弾き鳴らされ、現実の人間すなわち私は、この概念規則に従って生きることを強いられるのだ。」²²⁾と。

シュテイルナーにとって価値あるものは、概念としての人間ではない。いま、ここにおける、この私なのである。「じっさい現実的なのは、ここに現在、この人あの人として生きて動いている個々の人間だけ」²³⁾なのだ。ヘーゲルはそれを見逃している。自我は、神とか人類などというような固定観念などにいっさい関係なく、「存分に生を享受する (lebt sich aus)²⁴⁾もの」なのである。個々人にとっては、歴史的使命など全く関係ないものである。つまり、個人にとっては「彼の出発点は精神でもなく人間でもなくもっぱら彼自身」²⁵⁾なのだ。こうしてシュテイルナーは、市民社会の「市民的人間性の概念を自我にまで——赤裸々なる自我にまで」²⁶⁾還元してしまう。

次に、(2) の「自由」についての論述は、「シュテイルナーの著作中、

われわれにとって最も興味ある部分のひとつ²⁷⁾」であって、本書では「自由人」(Die Freien)の項で解説されている。そのなかに、政治的自由主義(Der politische Liberalismus)、社会的自由主義(Der soziale Liberalismus)、人道的自由主義(Der humane Liberalismus)の3ツが掲げられている。ただし、シュテイルナーの〈自由〉は、「唯一性、あるいは所有性の下位に置かれる。彼は、自由をあるものから逃れるための一つの条件と考えるが、生命の性質自体が絶体的な自由を不可能にする²⁸⁾」ものであると指摘している。

シュテイルナーはいう。「ブルジョアジーの時代とともに、自由主義の時代がはじまる。²⁹⁾」ところが自由主義とは、現存諸関係に対して与えられた理性的認識であるから、「されば、理性の支配するとき、個人は屈服する。³⁰⁾」以外はない。「〈政治的自由〉、このものを人は何と解すべきであろうか。たとえば、個々人の、国家とその法からの自由であるか。否、それどころか、それは、個々人の、国家における拘束であり、国法への拘束であるのだ。³¹⁾」また「〈宗教的自由〉は、宗教からの自由と解されるとでもいうのだろうか。それどころのさわぎではない。その意味するところは、要するに仲介者どもからの自由ということにすぎないのであって、つまりは仲介する坊主どもからの自由であり、〈僧俗〉(Laienschaft)の廃止、だから宗教ないし神にたいする直接無媒介のかかわりということではしかないのだ。人は、信仰をもつという前提のもとでのみ、宗教の自由を享受するのであり、宗教の自由とはつまりは、宗教喪失(Religionslosigkeit)でなく、信仰の内化(Glaubensinnigkeit)であり、神との直接的交通(unvermittelter Verkehr)の謂いなのだ。³²⁾」という。〈信仰の自由〉とは、信仰そのものから自由になることでなく、信仰の選択において自由になるということにすぎないのである。

社会主義的自由についても、社会主義者は個人を問題にしないで、いつも全体を問題にする。たとえば〈すべてのものが持つ〉ような社会などと

いう。これに対して、シュテイルナーはいう。「しかし、君らが集まっても、それは体の集まりで、一つの体にはならない。だから、一つの社会は、たしかに、それに仕える体の集まりをもちあはするだろうが、しかし、社会が一つの自分自身の体をもつことはないのだ。社会とは、政治家のいう〈国家〉と同様、一つの〈精神〉より以外の何ものでもない。³³⁾」のだと。そして「人間の自由とは、政治的自由主義においては、個人からの、個人的支配からの、主人からの自由であり、他の諸個人にたいする各個人の保全、つまり個人的自由であった。何ごとによせよ、誰ひとり命令できる者はなく、ただ法だけが命令をくだす。³⁴⁾」のだと。言い換えると「最高の指令者、唯一の命令者のまえで、われわれはすべては平等となり、平等な個人となり、つまりは零 (Nullen) となった。³⁵⁾」ことを意味する。これは「〈人間性〉の利益を旨とする、〈個人性〉にたいする第二の収奪 (der zweite Raub) だ。個人には、命令も、そして所有も許されない。³⁶⁾」ということになってしまう。

また、人道的社会主義について、彼は偉大な真理の発見者とか、優れた芸術家の例を示して、人道主義者と自我人を区別する。「おそらくそれは、この書物、この絵画、この交響曲等々が、彼の全存在の労働だったからであり、彼がそこに自らの最善をつくし、自らのすべてを傾け、そこに己のすべてを^{あら}露わさしめるからなのだ。それに対し、職人の仕事はただその職人を、つまり職人の腕前を映すだけで、〈人間〉をあらわさないといえようか。シラーの詩には、われわれはシラーのすべてをみる。が、これに対し、凡百のストーヴにわれわれは、ストーヴ作りを見はしても〈人間〉をみることはないのだ。³⁷⁾」だから「他の人間たちに対し、君が君を^{ひい}秀でさせるのは、君が人間であるからでなく、〈唯一〉者であることによってなの³⁸⁾だ。」ということが解るであろう。すなわち「君は、それをただ唯一者として成就したのであり、その点において、君は唯一なるものであるの³⁹⁾だ。」ということになる、という。

解り易くいうと、シラーの詩はシラーでなければ書けない。モッツァルトの音楽はモッツァルトでなければできないものなのだ。それはシラーやモッツァルトが唯一者であるからであって、このような唯一者というものは、〈普遍的人間〉だとか、〈類的本質〉だとか〈階級的人間〉などというような概念では把握できないものなのだ。一括することができないものである。これまでの哲学者の誤りは、この実存する人間諸個人を無視し続けてきたことであり、孤独な唯一者の存在を忘却してきたことである。凡百のストーヴでもみるように、安易に人間一般という概念で人間を捉えようとしてきたことである。このような概念で実存的人間を捉えることは不可能だとシュテイルナーはいう。何となれば「君は唯一なるもの」だからである、と。

念のため述べておきたいことは、エゴイストである彼は、他人に対して興味を抱かない、ということではない。他人の幸福を念じ、愛他心をもっている、ということである。だから「私もまた人間を愛するものであり、しかもただに個々人をのみならず、すべての者各^{おの}を愛するものではある。だが私は彼らを、エゴイズムの意識をもって愛するのだ。私は、愛が私自身を幸福にするがゆえに、彼らを愛するのだ。⁴⁰⁾」という。「愛は何ら定言命令 (Gebot) ではない。⁴¹⁾」だから、義務づけられた愛は宗教的であると同時に偽善なのである。

だからシュテイルナーの思想は、これまでのすべての固定観念に対する反抗となる。彼は「自由に騙されるな」「平等に欺かれるな」「自分のための自由を自分の力で捉えよ」と言い切っている。

次に、彼は革命と反抗を区別している。シュテイルナーはいう。「革命 (Revolution) と反抗 (Empörung) とは同義のものと見なさるべきではない。⁴²⁾」革命は「国家もしくは社会の転覆であり、ゆえに一つの政治的または社会的な行為である。⁴³⁾」が、反抗は「人間の己れ自身にかかわる不満から生ずるのであって、反乱ではなくて、個の立つこと、抬頭であり、それ

から派生する諸制度は意とするところではない。⁴⁴⁾つまり反抗は「われら己れ自身を立たしめることへと導くのであって、もろもろの〈制度〉(Institutionen) などには何ら目くらめく希望(Keine glänzende Hoffnung)を託したりはしない。⁴⁵⁾そして目的が「既成的なるものの転覆になく、その上に己れを立たしめることであるからには、私の意図と行為は政治的でも社会的でもなく、独り私自身と私の自己性に向けられたものとして、一つのエゴイスト的なそれであるのだ。⁴⁶⁾」と述べている。

この場合、彼はアルベール・カミュのように、革命を否定し反抗を賞讃しているが、「その根拠は個人の唯一性という彼の思想と密接に結びついている」⁴⁷⁾ものなのである。カミュも〈反抗〉は「人間が事物としてあつかわれること、単なる歴史に (à la simple histoire) に還元されることの拒絶」⁴⁸⁾であり、人間は〈反抗〉において「歴史に限界 (une limite à l'histoire) を設ける」⁴⁹⁾ことができる。つまり〈反抗〉は「自己の権利を意識した明識の人間 (l'homme informé) の行為」⁵⁰⁾として「人間に最初の価値をつくらせる共通の場所である。われ反抗す、ゆえにわれらあり (Je me révolte, donc nous sommes)」⁵¹⁾ということであり、シュテイルナーと同じく、唯一者の実存の照明として、明識ある人間の行為として説明する。反対に、革命については、「独裁的革命は、教義から出発 (la révolution césarienne part de la doctrine)」⁵²⁾するものだとして述べて、教義というような固定観念から出発する革命に反撥を示している。つまりカミュの思想のなかにもシュテイルナーが「百余年も前に放った予言的言葉」が息づいていることが解る。松尾氏はフランスの作家ジイドの中に、シュテイルナーの思想が「そのまま生きている」と述べたのち、ジイドが「1889年に書いた、スティルナアと個人主義と題した『プレテクト』 (prétextes) の記事で、スティルナアに触れ」⁵³⁾しており、かつ「ジイドがスティルナアと脉絡ある思想家」⁵⁴⁾とさえ述べているが、マニー (Claude-Edmonde Magny) の「アンドレ・ジイドの秘めたる倫理」 (L'éthique secrète d'André

Gide) のなかの言葉「人間は、自分の持札で勝負しなければならない」——人間は「恐ろしい選択」に迫られながら、「自分の道」を独り歩むべきもので、宗教的・政治的・道徳的・思想的ないっさいの教義を棄て、固定観念をすてて「自分の持札」で勝負しつつ、独り吾が道を歩むべきものだ、と述べているが、これは、ヘーゲルとは全く逆であり、またシュティルナーが本書で訴えんとしていたところでもあった。

- 注 1) D.McLellan, *The Young Hegelians and Karl Marx*, op. cit., p.118.
マクレラン『マルクス思想の形成』邦訳、前掲、191頁。○印引用者。
- 2) G.Woodcock, op. cit., p.100. 邦訳、前掲、139頁。
- 3) D.McLellan, *Karl Marx*, op. cit., p.143. マクレラン『マルクス伝』邦訳、前掲、138頁。
- 4) *ibid.*, p.143. 邦訳、前掲、139頁。○印引用者。
- 5) Woodcock, op. cit., p.97. 邦訳、前掲、136頁。○印引用者。
- 6) *ibid.*, p.97. 前掲、137頁。
- 7) *ibid.*, p.100. 前掲、138頁。○印引用者。
- 8) *ibid.*, p.100. 前掲、138頁。
- 9) D.McLellan, *The Young Hegelians and Karl Marx*, op. cit., p.118.
邦訳、前掲、191頁。
- 10) Max Stirner: *Der Einzige und sein Eigentum*, Reclam, S.7. シュティルナー『唯一者とその所有』片岡啓治訳、1977年、現代思潮社、10頁。
- 11) D.McLellan, *The Young Hegelians and Karl Marx*, op. cit., p.125.
マクレラン『マルクス思想の形成』邦訳、前掲、203頁。○印引用者。
- 12) K.Löwith, *Die Hegelsche Linke*, op. cit., S.16. 『ヘーゲルとヘーゲル左派』麻生健邦訳、前掲、23頁。
- 13) *ibid.*, S.16. 邦訳、前掲、22頁。傍点原著者。
- 14) 松尾邦之助、前掲、63頁。
- 15) 同書、63頁。
- 16) W.Blumenberg, *Karl Marx*, op. cit., S.40. ブルーメンベルク、邦訳、前掲、50頁。
- 17) K.Löwith, *Von Hegel zu Nietzsche*, op. cit., S.118. レヴィット『ヘーゲルからニーチェへ』邦訳(Ⅰ)前掲、134頁。
- 18) G.Woodcock, op. cit., p.94. 邦訳、前掲、131頁。○印引用者。
- 19) *ibid.*, p.95. 邦訳、前掲、132頁。○印引用者。

- 20) 松尾邦之助, 前掲, 91 頁。
- 21) M.Stirner, op. cit., S.80. 邦訳, 前掲, 98 頁。傍点原著者, °印引用者。
- 22) ibid., S.104. 邦訳, 127 頁, 傍点原著者, ・印引用者。
- 23) K.Löwith, op. cit., S.344. 『ヘーゲルからニーチェへ』邦訳 (Ⅱ), 前掲, 113 頁, °印引用者。
- 24) ibid., S.344. 邦訳, 前掲, 114 頁。
- 25) ibid., S.119. 邦訳 (Ⅰ) 前掲, 135 頁。
- 26) ibid., S.270. 邦訳 (Ⅱ) 前掲, 20 頁。
- 27) 松尾邦之助, 前掲, 121 頁。
- 28) Woodcock, op. cit., p.100. 邦訳, 前掲, 139 頁。
- 29) M.Stirner, op. cit., S.115. 邦訳, 前掲, 139 頁。
- 30) ibid., S.115. 邦訳, 前掲, 139 頁。
- 31) ibid., S.116. 邦訳, 前掲, 140 頁。傍点原著者。
- 32) ibid., S.116. 邦訳, 前掲, 141 頁。傍点原著者, °印引用者。
- 33) ibid., S.127. 邦訳, 前掲, 154 ~ 155 頁。°印引用者。
- 34) ibid., S.127. 邦訳, 前掲, 155 頁。傍点原著者。
- 35) ibid., S.129. 邦訳, 前掲, 156 頁。傍点原著者。
- 36) ibid., S.129. 邦訳, 前掲, 157 頁。
- 37) ibid., S.146. 邦訳, 前掲, 178 頁。
- 38) ibid., S.146. 邦訳, 前掲, 179 頁。
- 39) ibid., S.147. 邦訳, 前掲, 179 頁。
- 40) ibid., S.324. 邦訳, 前掲, 207 頁。傍点原著者。
- 41) ibid., S.326. 邦訳, 前掲, 209 頁。
- 42) ibid., S.354. 邦訳, 前掲, 245 頁。
- 43) ibid., S.354. 邦訳, 前掲, 245 頁。傍点原著者。
- 44) ibid., S.354. 邦訳, 前掲, 245 頁。
- 45) ibid., S.354. 邦訳, 前掲, 245 頁。
- 46) ibid., S.354. 邦訳, 前掲, 346 頁。傍点原著者。
- 47) G.Woodcock, op. cit., p.104. ウドコック, 前掲, 145 頁。
- 48) Albert Camus: L'homme révolté, Gallimard, 1951, p.296. カミュ「反抗の人間」佐藤朔邦訳 (『フランス実存主義』世界思想教養全集 24, 河出新社, 155 頁, 所収)
- 49) ibid., p.p296~297. 同書, 155 頁。
- 50) ibid., p.33. 同書, 149 頁。
- 51) ibid., p.36. 同書, 151 頁。
- 52) ibid., p.356. 同書, 192 頁。

53) 松尾邦之助, 前掲, 219 頁。

54) 松尾邦之助, 前掲, 220 頁。

III

シュテイルナーとマルクスは、個人的な面識はない。というのはマルクスは「シュテイルナーが同サークル（自由人クラブ）と接触する以前にベルリンを離れていた¹⁾」からマルクスとシュテイルナーの個人的面識はなかったと考えられる。しかしエンゲルスは 1841 年秋兵役のためベルリンにおもむいたとき、到着後まもなく青年ヘーゲル学派と接触し、「彼は自由時間をたいていは青年ヘーゲル学派の仲間入りしてすごした。²⁾」から、ここでシュテイルナーと知り合うことになる。1844 年 11 月 19 日付のエンゲルスからマルクス（在パリ）あての書簡によると、「〔君は〕まだ出てはいないが、シュテイルナーの著書『唯一者とその所有』のことは君も聞いていることと思う。ヴィーガンツが見本刷を送ってよこしたが、僕はケルンに持って行ってヘスのところに置いてきた。³⁾」「ベルリンのシュミットと言えば君も知っているでしょう——の原理は、ベンサム⁴⁾の利己主義で、ただ、それが一面ではいっそう徹底化されており、他面ではより不徹底にされているだけです。」「この利己主義は、現在の社会や現在の人間の本質が意識化されたもの、現在の社会がわれわれに向って抗弁できる最後のもの、現存の愚論のなかでの、すべての理論の頂点であるにすぎない。だが、それだからこそ、このものは重要なのであり……そして、それをひっくり返すことによって、その上に建設を続けなければならない。⁵⁾」「しかし、原理として真実な点⁶⁾は、われわれも受け入れなければならない。」つまり、「われわれは、あるかもしれない物質上の期待は別としても、やはり利己主義によって共産主義者なのであり、利己主義によって単なる個人ではなく、人間であろうと欲するのだということである。あるいはまた、

別の言い方をすれば、シュテイルナーがフォイエルバッハの〈人間〉を少なくとも『キリスト教の本質』のなかの〈人間〉を、非難しているのは正しい。フォイエルバッハの〈人間〉は神から派生しているのであり、フォイエルバッハは神から《人間》に到達したのであり、したがって〈人間〉はもちろんまだ抽象という神学的な後光で飾られている。〈人間〉に到達する真実の道は、これとは逆の道である。われわれは、自我から、経験的な生身の個人から出発して、シュテイルナーのように、そこで立往生しないで、そこからわれわれを〈人間〉にまで高めなければならない。〈人間〉は経験的な人間に基礎をもっていないかぎり、つねに幽霊である。要するに、われわれの思想やことにわれわれの〈人間〉が真実なものであるためには、われわれは経験論と唯物論から出発しなければならない。われわれは一般を個別から導き出さなければならないのであって、それ自身から導き出したりヘーゲル流に空から導き出したりしてはならない。」⁷⁾しかし「もしわれわれの〈人間〉にとっては、生身の個人が真の基礎であり真の出発点であるならば、われわれの人間愛にとって利己主義が——もちろんシュテイルナーの言う理性の利己主義だけではなく心情の利己主義も——出発点だということは言うまでもない。もしそうでなければ人間愛は空中に浮いてしまう。⁸⁾」「しかし、シュテイルナーの著書もまた、どんなに深く抽象がベルリン気質に根ざしているかを示している。⁹⁾」「シュテイルナーは明らかに〈自由人〉のうちでは才能でも独立性でも勤勉さでも、いちばんすぐれている。¹⁰⁾」また1845年正月20日付のエンゲルスからマルクス（在パリ）あての書簡によると「シュテイルナーについては、まったく同感です。君に手紙を書いたときには、まだあまりにも、この本の直接の印象にとらわれていたが、それを放り出してもっと熟考することができるようになってからは、君と同じことを感じている。¹¹⁾」と。

おそらく、マルクスは公刊されたシュテイルナーの『唯一者とその所有』を読んで——とくにヘーゲル以下、ブルーノ・バウアーやフォイエル

バッハのみならずマルクスその人に対してさえ加えられた弾効に反撥して、エンゲルスあてにシュテイルナー攻撃の返書を長々と書いたものと思われる。また『唯一者とその所有』にかんしてはマルクスもエンゲルスも深い関心をもたざるをえなかったこと、またシュテイルナー反撃について2人の意見が一致したものと推察することができる。

かくて、シュテイルナーの『唯一者とその所有』の公刊で「満身に傷を受けたマルクス」(アルヴオン)が『ドイツ・イデオロギー』で「聖マックス」と題するシュテイルナー批判を書くことになるわけだが、「聖マックス」という題名は、マルクスが「ベルリンの青年ヘーゲル学派であるバウアー兄弟とその追随者たちに与えた形容詞¹²⁾」であり、だから『神聖家族』との血縁関係を明らかにするために、皮肉まじりにシュテイルナーに「聖マックス」という呼び名をつけ、しかも『ドイツ・イデオロギー』の全体の3/4を占める膨大な第三部の部分は、この「聖マックス」つまりシュテイルナー批判の文章となっているのだ。マクレランは「〈聖マックス〉は余りにも誇張的で読む価値がないかも知れないが、一体なぜそれがそこにあるかは、問うてみる価値がある。」¹³⁾と述べているが、じつは「同著作(「聖マックス」)は、それまでマルクスによって主張されてきたフォイエルバッハ的人間主義から史的唯物論への推移を、あらたな角度から照らし出している¹⁴⁾」著作だけに、マルクスの思想の展開——ことにフォイエルバッハを離脱するという意味で——を理解するうえで、極めて重要である。

まず「聖マックス」が「何故そこにあるかを問うてみる」ことから始めよう。シュテイルナーの弾効を受けたマルクスがエンゲルスの協力をえて、(エンゲルスと意見が一致したから)、シュテイルナーに対する反論を書く決意を堅めたこと。次に1846年3月24日付のマルクスあてのイエニー夫人の書簡によると「シュテイルナーと進歩との問題はどうかになっていきますか? いずれにせよ、執筆にとりかかることが必要でしょう。シュライヒャーはもう2度もこのことをたずね、彼の手にはいる著作について、た

いへんにがにがしげにこぼしています……いつわりの予言者たちはこうしていっさいの社会環境をけがしているのです。¹⁵⁾」と書かれているからマルクスが夫人から「いずれにせよ、執筆にとりかかることが必要」といわれ、夫人は「マルクスにシュテイルナー批判をせきたてていた」¹⁶⁾ことも確かである。「聖マックス」の部分は5月上旬に完成している。(マルクス年譜)、つまりイエニー夫人にせきたてられて、マルクスのシュテイルナー批判は「怒気を帯び、あまりにも好戦的で、あまりにも回りくどい論証法(Polemik)¹⁷⁾」となってしまったばかりか、彼ら(マルクスとエンゲルス)の自信と批判的才能から生じた嘲笑(Spottlust)や揶揄(Witzelei)が加味されたから、この「聖マックス」の文章は「読者の忍耐をしばしば厳しい試練に立たせる」¹⁸⁾くらい、読みにくく、うんざりするような回りくどい内容となっている。

シュテイルナーは「カール・マルクスの光彩をはなつ知性は高く評価するものの、〈独仏年誌〉に発表したばかりのきわめて注目すべき2論文のあと、抽象的人間つまりL. フォイエルバッハが『キリスト教の本質』で神格化した人間のかげに、現実の人間を隠したがっているとして、マルクスそのひとを批判する。よきヘーゲル主義者としてシュテイルナーは、《自我》から特権を剝奪し、古代の人格神におとらぬ虚構の新しい至高存在を持ち出してくるとして、マルクスを弾劾するのである。告発された原文を公平に検討すれば、批判されるいわれのあることは否めない。それだけに、この弾劾で満身に傷をうけたマルクスは——彼がフォイエルバッハ主義者であるのをやめるのは、ようやく『唯一者とその所有』刊行後であり、したがって、シュテイルナーの攻撃がどの程度これにあづかって力があったか、問うてみることもできよう——親友エンゲルスの協力をえて〈聖マックス〉という題名の長大で辛らつな批判をもって反論¹⁹⁾」することになった。つまりシュテイルナーの『唯一者とその所有』はマルクスをフォイエルバッハから引き離す結果となるのだ。マルクスが「フォイエルバ

ッハ主義者であることを止めるのは、『唯一者とその所有』の刊行後』と
いうことは、マルクスの思想発展を理解するうえで極めて重要なことなの
である。

マクレランによると、シュテイルナーは「マルクスをフォイエルバッハ
の影響から引き離すことによって、マルクスの思想の発展に非常に重要な
役割を演じた。マルクスをフォイエルバッハから引き離すこのシュテイル
ナーの役割は、つぎの3つの点を示すことによって最もよく明らかにする
ことができる。すなわち、第1に『唯一者とその所有』の出版の時期のマ
ルクスがフォイエルバッハの弟子であったし、また（いっそう重要なこと
であるが）そう見なされていた、ということ。第2に、シュテイルナーの
著書が重要と見なされ、かれのフォイエルバッハ批判が広範な影響をもっ
た、ということ。そして第3に、『ドイツ・イデオロギー』がこの論争に
関連して構想され、シュテイルナーから諸原理を借用しているフォイエル
バッハ批判と、かれのフォイエルバッハ攻撃の有効性を暗黙裡に認めなが
らも、それがもはや当てはまらないと主張するシュテイルナー批判とから
成っている、ということである。²⁰⁾」と述べている。

この点をもう少し具体的に説明しよう。まず「シュテイルナーによって
攻撃されたグループのそれぞれは、かなりの長さで反論した。セリガ
(Szeliga) とブルーノ・バウアーはともに論文を書き、フォイエルバッハ
もまた反論した。ヘスは『最後の哲学者たち』(Die letzten Philosophen)
という論文を書き、マルクスとエンゲルスは一冊の本の大部分をこれに
(シュテイルナーに対する反論に) 当てた。1847～8年になっても、若き
クーノー・フィシャー(Kuno Fischer)はその処女作を『唯一者とその所
有』の攻撃に捧げた。だれもが、シュテイルナーが注目すべき敵対者であ
ることを認め²¹⁾た。」というような状況であったということ。次に『唯一者
とその所有』の「最も影響的な箇所は、フォイエルバッハの〈人間〉とい
う概念が、以前よりいっそう普遍的ではあるが、まだ以前と同じく人びと

がそれに隷属的である抽象にすぎない、という理由に基づくフョイエルバッハ批判であった。」²²⁾ということである。しかもマルクスもエンゲルスもシュテイルナーのフョイエルバッハ批判を暗黙のうちに肯定し承認していたことである。つまり「マルクスとエンゲルスは、かれらがそれまで決してしなかった仕方自分たちとフョイエルバッハを明確に区別し、かくて暗黙裡にシュテイルナーの批判を受け入れている」²³⁾という点である。だからこそマルクスがフョイエルバッハの思想的影響から離脱しえたのであり、言い換えるとマルクスがフョイエルバッハから離脱しえたのは、シュテイルナーの『唯一者とその所有』のおかげなのだ、ということになる。

マルクスには、人間解放の意識はあったが、現実の諸個人の实存にかんする視点が欠けている。マルクスのように、歴史的社会的＝経済的人間、または階級的人間という人間把握で脱落してしまうのは、現実の個々人の実存にかんする分析の問題である。というのは、いま個々人を考えてみれば「人は個人としては常に唯一者」であるし「唯一者は2度と存在し得ない、したがって言葉でも表現することの出来ない、者である」²⁴⁾。からだなのだ。つまり「個的な実存としては、人は、分かつたれず、完全に彼自身であり、自らをペルソナ的に分かつことが出来ない」²⁵⁾ものだからである。いいかえると普遍的人間概念のなかに、諸個人を押し込む (unterschieben) とは危険なのだ。シュテイルナーは、現実の諸個人たとえば、私というものは、「もはや人間の一般的な〈類的存在〉 (Gattungswesen) にではなく、自我にのみ加えられるこの極端な有限化と時間化」²⁶⁾として捉える。人間を唯一者として、限界状況下に投企された実存的存在として捉える。キエルケゴールにしてもニーチェにしてもシュテイルナーにしても、「彼らが反対する普遍性ならびに、彼らがそれが原因でそしてそのために反対するところの個人性」²⁷⁾を主張せんがために情熱を傾けて反対しているのである。

ところがマルクスは「シュテイルナーを崩解した市民社会、つまりバラ

バラな砂のような諸個人の社会のイデオログ」そして「シュテイルナーがみずからを解放しようとするのは、現実の生活関係からではなくて単なる意識上の関係からである。かれは市民社会の個人的エゴイズムにとらわれているため自分ではそれを看破して²⁸⁾いない。」のだ。シュテイルナーのような思想家は「実はただ〈思弁という^{かかと}踵^コにのって^マ独楽のように廻っている〉だけなのに、〈自分の思想の欠亡を哲学の終り、したがって真の生活の堂々たる開始だと布告〉することによって、哲学を²⁹⁾斃死」せしめている、と反論した。

ところで、シュテイルナーの「火を吐くような文面で展開される、この教理を理解するには……疎外と回復の概念に助けを求める必要³⁰⁾」があるが、本書の主旨は「第一部において、あらゆる疎外と、最新の疎外なかんずくフォイエルバッハの人間主義とたたかうことであり、第二部において、結果として、次に来る回復をおこなうこと³¹⁾」であった。だが、「シュテイルナーの本が出版されたのは1844年9月頃（11月末の誤りか）で、明らかに8月——その月までにマルクスの『パリ手稿』は完成されていた——よりは早くはなかった³²⁾」し、「マルクスの疎外された労働〈そのもの〉に関する主要な労作は、1844年にパリで書かれた『手稿』である³³⁾」から、この2つの事実を照合すれば——両者のあいだには面識も文通もないのだから「疎外された労働」についての解釈は、マルクスだけが「この時期に、このようなことを考えていた唯ひとりの人では決してなかった³⁴⁾。」わけで、経済的自己疎外とその回復という思想は、むしろ当時の青年ヘーゲル学派の共通の思想であったに違いない。少くとも「〈疎外された労働〉とか〈搾取〉という概念が、ドイツ人の間でさえも、決してこの時期のマルクスに限られたものではなかった³⁵⁾。」といいえよう。『唯一者とその所有』の第1部、第2章、第3節「自由人」第2項の「社会的自由主義」の章句のなかには〈分業の悪い結果〉と〈労働生産物の労働者からの疎外〉を分析した章句がある。

たとえば「機械的労働（maschinenmässige Arbeit）への人間の呪縛（Bannung）は奴隷制（Sklaverei）と符号するのだ。一人の工場労働者（Fabrikarbeiter）が12時間かそれ以上ものあいだ死ぬほどに働かねばならぬとしたら、この労働者は人間となること（Menschwerdung）を奪われているのだ。」³⁶⁾と述べているし、また「ピン工場で頭をつけるだけ、針金をのぼすだけ、等々の者は、機械的に、一つの機械のように働いているのだ。……その労働は、それ自体としてみれば無であり、それ自身の内に何の目的もなく、それ自体では何ら完結されることはない。彼は、ただ誰か他人の仕事の助けをするだけであり、この他人によって利用される（benutzt）搾取される（exploitiert）だけなのだ。他人に仕えるこの労働者にとっては、教養ある精神の享受（Genuss eines gebildeten Geist）などはありません³⁷⁾、たかだか粗野な快樂があるだけだ。」と書いている。

これをもってみても、マルクスの『パリ手稿』にみられる経済的自己疎外の内容が同じ頃に執筆公刊されたシュティルナーの著作のなかにも認められることは明らかである。繰返すようではあるが、「〈疎外された労働〉とか〈搾取〉という概念」は、けっしてこの時期のマルクスに限られたものではなく、要するにマルクスの創意とか新造語というようなものではなく、〈疎外と回復〉は、当時の青年ヘーゲル学派の流行語であったものと考えられる。

注 1) アルヴォン。邦訳、前掲、46頁。

2) F. Engels, Eine Biographie, op. cit., S. 52 『フリードリッヒ・エンゲルス伝記』土屋・松本、邦訳、前掲、45頁。

3) M.E.G.W. Band 27. S. 11. 『マル・エン全集』第27巻、10頁。

4) ibid., S. 11. 同書、10頁。

5) ibid., S. 11. 同書、10～11頁、傍点原著者。

6) ibid., S. 11. 同書、11頁。○印引用者。

7) ibid., S. S. 11～12. 同書、11頁。○印引用者。

8) ibid., S. 12. 同書、12頁。傍点原著者。

9) ibid., S. 13. 同書、12頁。

- 10) ibid., S.13. 同書, 12 頁。○印引用者。
- 11) ibid., S.14. 同書, 14 頁。
- 12) アルヴォン, 前掲, 121 頁。
- 13) D.McLellan, The Young Hegelians and Karl Marx, op. cit., p. 135. マクレラン『マルクス思想の形成』前掲, 邦訳, 219 頁, 傍点原著者。
- 14) アルヴォン, 前掲, 121 頁。
- 15) ヴィノグラドスカヤ『マルクス夫人の生涯』嶺高志邦訳, 大月書店, 1974 年, 99 頁, ○印引用者。
- 16) 同書, 99 頁, ○印引用者。
- 17) W.Blumenberg. Karl Marx, op. cit., S.64. ブルーメンベルク, 邦訳, 前掲, 80 頁。
- 18) ibid., S.64. 同書, 80 頁。
- 19) アルヴォン, 前掲, 120 ~ 121 頁。
- 20) D.McLellan, The Young Hegelians and Karl Marx, op. cit., p.129. マクレラン, 邦訳, 前掲, 209 頁。
- 21) ibid., S.130. 邦訳, 前掲, 211 ~ 213 頁。
- 22) ibid., p.p.130~131. 同書, 212 頁, 傍点原著者。○印引用者。
- 23) ibid., p.131. 同書, 213 頁。
- 24) レヴィット『人間存在の倫理』佐々木一義邦訳, 昭和 51 年, 理想社, 311 頁, 傍点原著者。
- 25) 同書, 300 頁。
- 26) K.Löwith, Von Hegel zu Nietzsche, op. cit., S.120. レヴィット, 邦訳 (I) 前掲, 136 頁, ○印引用者。
- 27) レヴィット『人間存在の倫理』前掲, 299 頁。
- 28) K.Löwith, Von Hegel zu Nietzsche, op. cit., S.120. 邦訳, 前掲, 137 頁。
- 29) ibid., S.120. 邦訳, 前掲, 137 頁。
- 30) アルヴォン, 前掲, 50 頁。
- 31) 同書, 51 頁。
- 32) D.McLellan, The Young Hegelians and Karl Marx, op. cit., p.133. マクレラン『マルクス思想の形成』前掲, 216 頁。
- 33) ibid., p.132. 邦訳, 216 頁。
- 34) ibid., p.133. 同書, 216 頁。
- 35) ibid., p.136. 同書, 221 頁。
- 36) M.Stirner, Der Einzige und sein Eigentum, op. cit., S.131. 邦訳, 前掲, 159 頁。
- 37) ibid., S.131. 同書, 160 頁, 傍点原著者。

む す び

筆者は小論において、Ⅰでシュティルナーの生涯を、Ⅱで彼の主著『唯一者とその所有』を中心に彼の思想の概要を、Ⅲでシュティルナーとマルクスの関係について述べてきた。

以上で明らかのように、a) シュティルナーはヘーゲルに学んだが、ヘーゲルと全く逆の立場に進んだ哲学者であること。つまりヘーゲルの全体に対して、唯一者たる個を、提唱したこと。「本質と実存、本質と存在の問題」さらには、理性に対する現実存在の優位性という問題は、つきつめていくと、ヘーゲ尔的観念論の根本的な欠陥——つまり「概念によって弾きならされる」ヘーゲル哲学には、個人の実存の分析がスッポリ脱落してしまう——に由来しているものだから、シュティルナーが唯一者の実存を提唱したことは、ヘーゲル哲学に対する「滅法パンチの効いた批判」であったということ。b) マルクスの思想形成を理解するうえで、シュティルナーの果たした役割は重要であること。つまり、シュティルナーの批判はマルクスの思想発展のうえで成長ホルモンの役割を果たしたということ。シュティルナーのフォイエルバッハ批判が、当時フォイエルバッハの弟子と称していたマルクスにとって、効果的な成長促進剤となって作用していったこと。c) 唯一者たる我というものは、概念しえない存在であって、個人の実存に定った体系などあろうはずがなく、人間は人間として最高の存在なのであって、神とか人類とか、その他いっさいの固定観念などに何ら囚われをもってはならず、人間は時間的にも空間的にも、みずからが投企された、この有限の、この人生において、恐るべき選択に迫られながら、日々を「自分の持ち札で勝負していく」しかない孤独な唯一者なのだ、というシュティルナーの叫びは、彼をして「実存主義の原点」(アルヴォン)といわしめるくらい重要な思想家であったことを窺い知ることができた。

想えば、こんにちまで130余年もの長い間、忘れられ、無視せられ、不当にも過少評価され続けてきたシュティルナーに対して、今後、正当な思想史上の位置づけが与えられてしかるべき優れた思想家であったということも、あわせてご理解戴きたいと思う。